

# 棟田 博論

—— 戦時体制下の文学者 (四) ——

都 築 久 義

## 兵隊作家と素人作家

兵隊作家といえ、すぐに火野葦平のことが想い起こされ、上田広や日比野士朗の名が浮かぶ。たしかに、彼らは「支那事変」に応召し、兵隊として戦地で戦かい、その体験や見聞を書いて世に知られるようになった作家である。

昭和十二年七月七日、北京郊外、蘆溝橋附近の銃声一発で「支那事変」が勃発するや、文壇からも大勢の作家が新聞社や雑誌社の特派員として現地向かい、戦地の様子や戦況の報告を新聞や雑誌に寄稿した。そのため文壇では現地報告や従軍記が花ざかりとなり、戦争文学論やルポルタージュ論が大きな話題となった。この盛況と人びとの関心ぶりに気をよくしたのか、戦地から送った火野葦平の「麦と兵隊」(『改造』昭13・8)の評判と人氣に刺激されたのか、事変の勃発から一年後の昭和十三年九月、内閣情報部は二十二名の文学者を、漢口攻略作戦に従軍させた。

このいわゆるペン部隊については、本論集第五号の拙稿（「戦時体制下の文学者——ペン部隊を中心に——」）でふれたように、その人選をめぐってさまざまな臆測や噂が飛びかい、複雑な波紋が投ぜられたが、出発まえから文壇やマスコミが大騒ぎをし、内閣情報部が期待したわりには成果がなかった。ペン部隊に参加した文学者の従軍記には、ほとんど人びとが関心を寄せなかつたのである。もはや、戦争の傍観者の従軍記や戦闘の終った地域の現地報告では、読者を惹きつけることはできなかったのだ。

文学者たちの描写力や筆力がどんなにすぐれ、あるいは戦いへの決意がいかに力強く語られようとも、現実には銃を持ち命を的に戦っている兵士たちの、生々しい実戦記録や緊張感にはとうてい及ぶべくもない。その意味で、實際の兵士であった火野葦平の徐州会戦従軍記「麦と兵隊」が、発表されるやいなやたちまち全国的な評判を得て圧倒的な人気をよんだのは、まさに当時の国民の関心と期待に応えたからにはほかならないだろう。

「麦と兵隊」には激しい戦闘描写もなければ、皇軍の輝かしい戦果の披露もない。広漠と続く麦畑のなかを黙々と行軍する兵士の姿と周囲の風景、蚤や蚊に悩まされる野営といった、兵隊の日常生活と戦場の風景が、淡々とした筆致と素朴な表現で点描されているだけである。戦争批判や軍隊生活の内部告発はもとより、小説的構想もなくただ日記体で綴っているにすぎない。が、それがかえって戦場のリアリティと臨場感を読者に与え、戦争と兵隊の事態をよく伝えている。そしてなによりも、筆者が戦争を見ている人ではなくて行なっている人であること、北原武夫の、「戦争文学論」（『文学と倫理』昭15・11中央公論社）の表現にしたがえば、「戦争の中にあるもの」と外にあるものの差」（傍点原文）となって、文学者の従軍記や現地報告を圧倒したにちがいない。

「麦と兵隊」の成功は、火野と同じようにもの書ける兵隊たちを刺激し、続いて脚光をあびたのが上田広である。上田も昭和十二年の九月はじめに召集され、任地の河北省、石家荘に向かった。ただし、任務は鉄道部隊であ

ったから、物資の輸送や沿線の警備・保全、住民の宣撫工作が主であり、前線での戦闘は少かった。そのためもあって、実は火野が『改造』に「麦と兵隊」を発表した昭和十三年八月、上田もまた陣中創作と銘打って、『中央公論』に「鮑慶卿」を寄稿し、十二月にも同誌に「帰順」を載せ、この間、同人誌の『文芸首都』に戦地から送っていた「黄塵」を、十三年十月号『大陸』に一拳に再掲載したが、いずれも戦地や中国を舞台にしても、直接的に戦争を扱う小説を書かず、人気はいまひとつだった。しかし、火野が十四年十一月に帰還し、数日後に上田も帰って来ると、帰還作家としてはやされ、こんどはズバリ「建設戦記」(『改造』昭14・4)を書き、兵隊作家の本領を発揮して人びとの期待に応えた。

日比野士朗もやはり九月に応召したが、上海戦線の呉淞クリークの激戦で負傷、帰還してこの体験を「呉淞クリーク」と題して『中央公論』の昭和十四年二月号に発表。続いて同誌六月号にも「野戦病院」を寄稿し、『文学界』六月号の「出帆」なども収録して、七月には中央公論社から『呉淞クリーク』を処女出版した。小林秀雄は東京朝日新聞の「槍騎兵」欄で、八「呉淞クリーク」だけが戦争ではあるまい。だが作者は、この戦争の一面面に、自分の精神を一つばいに限なく使用してゐる。その事がこの短篇を最近の文学の一傑作としてゐるのだと思ふ。(昭14・11・26)と評価している。

ところで、これら兵隊作家とよばれ、当時のマスコミの寵児であった作家は、前述のように「支那事変」に応召して、その体験や見聞を書いていちやく注目されるようになったものではあるが、ここで特に留意しておきたいのは、この三人は召集される以前から、相当の文学活動をしていたということである。周知のとおり火野葦平は芥川賞を受賞しているし、上田 広は国鉄に勤務するかたわら、はやくからプロレタリア文学系の『文学建設者』(昭9・2創刊)で活躍し、応召した当時は『文芸首都』の同人であった。戦地から送った「黄塵」の連載が『文芸首

都』で始まったのは十三年一月、「麦と兵隊」よりも半年もまえのことだ。日比野士朗も年譜によれば、大正十二年に第八高等学校を中退してしばらくのち、両親の住む仙台に赴き、東京の友人と同人誌活動を行なったり、河北新報に連載小説を載せている。その縁で河北新報社に務め、やがて日本新聞連盟事務局に移り、召集を受けたのである。『日比野士朗と涌谷』（昭52・6、日比野士朗追悼文集刊行会）所収の「わが交友録」を読むと、この間に著名な文学者や雑誌編集者と接触していることがわかる。

つまり、彼らはいまだ無名ではあったが、作家だったのである。すくなくとも彼らは小説家を志し、それなりの文学的活動を行ない、業績も持っていた。ちなみに、『文芸年鑑』一九三九年版は、文壇関係応召者一覧を掲げ、雑誌編集者や映画監督まで含めて、十七名の氏名をあげている。上田広や日比野士朗の名前はないが、壇一雄、中野実、火野葦平、宮地嘉六などは載っている。たしか里村欣三も特務兵として行ったはずだ。

このように兵隊作家といっても、火野・上田・日比野の三人は、厳密に言えば兵隊の体験をした作家であり、その体験記や見聞録が出世作となった作家ということになる。ところがこの「支那事変」では、彼らのような文学活動や大した業績がなくとも、自分の体験した実戦記を発表しただけで、一夜にして著名になった者も少くない。板垣直子は、『現代日本の戦争文学』（六興商会出版部、昭18・5）で、「実戦者の作品」という項目を設け、さらに小項目の「初期に於ける将兵及び民間の戦争もの」のなかで、八事変のすすむにつれて出てきた無数の事変文学は、殆ど皆、五年にわたり大陸の各地で、実際に戦闘の経験を重ねた将兵の筆になつたものばかりである。√と言い、八普通の兵や将校のかいたもの√をいくつか紹介している。が、――

素人的作品の中にも、亦、自ら優劣のあることは免れない。私はこの分類に入れてよい最も秀でた例として、

棟田博の仕事に注意したいと思ふ。はじめ素人として戦争ものをかいた中で、棟田の仕事は一時的で終わらない唯一の例ではないかと思ふ。

と、素人・棟田博を格別に注目し、「分隊長の手記」を長文にわたって引用している。ついでながら、火野葦平、上田広、日比野士朗も論評しているが、むろんここでは扱っていない。それぞれ、「火野葦平の作品」と「上田広の鉄道建設もの」と日比野士朗の『呉淞クリーク』という小項目をたてている。いずれにしても、棟田博の作品を「普通の兵」——素人が書いたものとして、火野・上田・日比野と区別しているのが興味深い。

## 生いたち

棟田博は明治四十一年十一月五日、岡山県英田郡倉敷町に生まれた。倉敷町はのちに林野町となり、現在は美作町に合併している。父は伊藤諸助、母は志け（戸籍名）、四男一女の二男である。ただし姉は夭折している。父は金物雑貨商を営んでいたが、事業欲が強く、当時、建設がすすめられていた幡備鉄道にかかわり、相当に入れあげたが借財だけを残す結果となり、神戸に出てあれこれのブローカー的な仕事を手がけたものの、こちらの方もおもしろくなかったようだ。

戸籍を見ると、「大正七年拾壹月貳拾七日棟田よ祢の養子となる縁組届出（養子の代諾者父）岡山県英田郡林野町大字林野百拾九番地伊藤李太郎戸籍から入籍」とある。伊藤李太郎は祖父。よ祢は母の実家の姉。津山市西新町で料理旅館、若狭屋を営むお女将であった。若狭屋は吉井川の船宿で、いまでも住む人は誰もいないが、建物だけは

昔の面影のまま残っていると聞いている。

大正七年といえ、林野尋常小学校の四年生であるが、棟田博の話によれば、このときの養子縁組は戸籍のうえだけで、やがて父が神戸に出たので一緒に行き、神戸市の雲中小学校に転校したという。そして神戸一中（現・神戸高校）に進学したが、父の経済状態が悪化して四年で中退したとのことである。（神戸一中の入学・退学年月については確認していない）そこで津山に帰り、若狭屋の親戚筋で金融業をしている人のところに預けられ、商売の勉強をさせられることになった。この間、昭和四年一月から二年間、兵役に服し、岡山の歩兵第十連隊で軍隊生活を送った。

棟田博は、戦後も自らの軍隊生活や兵隊体験を多く語っても、それ以外の自伝的な部分はほとんど書かないが、「揮啓天皇陛下様」（『週刊現代』昭37・4―10）には、次のような記述がある。

当時のわたしには、この二か年の軍隊生活を踏み切り台にして、現在の境遇を跳馬のように飛び越え、まっしぐらに進んでゆきたい道があった。文学への道である。かねてからわたしは、将来りっぱな商人になって家を興すべき者が、歌など作っていてどうなるかと、おじの叱責をうけていた。そのころのわたしは、謄写刷りの短歌同人誌の地方歌人のひとりであった。そして、歌から散文へと移行しつつあったのである。当時のわたしにはそろばんの世界は卑しく、ペンの世界は高貴なのだった。

棟田がかかっていた「謄写刷りの短歌同人誌」は未見で詳細は不明だが、彼は千葉県印旛沼から吉植庄亮が出していた『橄欖』を愛読し、投稿もして、その投稿欄で同郷の同志を見つけ、短歌雑誌の発行に加わったとい

っている。

金融業といえはまだ聞こえもよいが、要するに高利貸しの所で、金貸し業の非情さや商売の実態を眼のあたりにしていたのだから、「そろばんの世界は卑しく、ペンの世界は高貴」だと考えても無理はない。彼は一刻もはやくこの世界から脱け出したいと思った。だが、「おじ」の目が光っていてなかなか決行できなかった。そのうちにしだいに酒色に走り、遊蕩にふけるようになり、「おじ」の目をごまかして金銭の苦面を始めた。そして、そのことが発覚したとき、彼は東京への出奔を決行した。

この物語では、それからの東京生活は詳述に及ばないと思われる。わたしがそれを好まないように、貧しい文学青年のありきたりのジメジメした生活などだれも好むはずがないと考える。ただ、東京の宿のはじめての朝号外の鈴の音がけたたましく鳴りひびき、五・一五事件を伝えたことをわたしは忘れがたく今も思い出している。（「拝啓天皇陛下様」）

どうやら彼が東京へ出て来たのは、五・一五事件の起きた昭和七年だったようだが、それから「支那事変」で召集を受けるまでの、「貧しい文学青年のありきたりのジメジメした生活」の実態はよくわからない。その点を本人にたずねてみても、五十年も昔のことで記憶もさだかでなかった。もうひとつの自伝的小説『生と死の間に』（昭和33・4 浪速書房）には、北海道に出た頃は鴨原伍一の従兄の足立乾太を訪ねていったとある。鴨原は津山の短歌雑誌の同人だ。そして新聞配達をしながら当面の生活費を稼いだが、配達なかまから北海道行きを誘れ、北海道の一カ年の放浪生活から、満身創痍ともいふべき状態で、ふたたび東京へ舞い戻り、北海道行きを誘れ、

の群れに投じて、雑文を書き、救いがたき文学青年的生活の中でのたうちまわっているうちに、「赤紙」をもらい受けたVと書いている。彼がどのような文学青年の群れに投じてVいたのか、どこにA雑文を書Vいていたのかもはっきりしないが、のちに師となる長谷川伸は、「棟田伍長と私」(後出)で、A棟田君は地方の商業学校を卒へた人で、将来は判らないが過去では、文筆家ではなかった、現在も文筆家ではないVと言っている。

その長谷川伸との出会いについては、『大衆文芸』(昭38・8)の長谷川伸追悼号に、「空席の深さ」と題する追悼文を寄せ、次のように回想している。

私は東京生活のドン底の中で自分を墮落と虚無へ投げつけていた。その折り、一面識もない先生へ無心の手紙を出したのは、「夜もすがら検校」を読んで、いたく感動していたからである。無心とはいっても、古い和綴の与力某の手控之帳のようなものを買ってくれと送り届けたのである。多分、そうした臆面もない無心が無視されるのであるうことは自分にも判っていた。が、無心した金額が送られてきて、ことの意外さに私は愕いたものだ。

支那事変はそのまた数年後であった。出征に際し、兵営から、あれ以来、はじめて私は先生に手紙を出した。お忘れかと思うが、いつか、臆面もない無心をした男であるが、兵隊になってこれより戦場に赴くに当り、謝恩いたしますと書いた。折り返し、先生から手紙と、先生が集めて下さった七十九名の人々のサインを集めた日の丸の旗が贈られてきた。私はその日の丸の旗を腹に巻き、北支の戦場へ行ったのである。

棟田が感動したという「夜もすがら検校」は、大正十三年二月号の『新小説』に発表された長谷川伸の出世作。

同名の単行本（大13・5 春陽堂）もあり、名作として名高い。それにしても、一読者が「古い和綴の与力某の手控え帳のようなもの」を勝手に送って金が無心をするというのも、いささかあつかましいが、その未知の読者の無心にこたえて金を送ったのは、さすがに苦勞人で人情作家として知られる長谷川伸らしい。『棟田博兵隊小説文庫・1 分隊長の手記』（昭49・8 光人社）の解説を担当した真鍋元之は、棟田博が長谷川伸に無心した金額は五円、長谷川が送ってきたのは十円だったと書き、「相手が奸悪な人間でないかぎり、こういうやり方、つまり五円の無心にたいし、十円恵与するのが、終生かわらぬ長谷川伸のやり方であった」こともつけ加えている。

棟田博が召集令状を受けとって、岡山の歩兵第十連隊に応召したのは、昭和十二年七月二十八日である。ときに彼は二十五才。それから一カ月後、神戸を出帆して戦地へ向かった。『分隊長の手記』（後述）には、次のような「作者の戦歴」が付載してある。

赤柴部隊歩兵上等兵（分隊長）として、塘沽上陸、天津を経て、濁流鎮、静海県、馬廠、滄州より山東省に入り、山東平原を横断、津浦線を南下、十二月二十三日濟南入城、更に南を指して徐州へ進軍、昭和十三年五月二日台児莊戦線、奥隆橋東方突角陳地突撃敢行の際、手榴弾にて負傷、後送され〇〇より乗船内地帰還。

### 長谷川伸との出会い

棟田博が負傷した台児莊戦線は、例の火野葦平の「麦と兵隊」で有名な徐州会戦の前哨戦とも、逆に原因になった戦いともいわれ、中国側も相当に兵力をつぎ込んだ、「支那事変」の初期としては最も激しい戦闘が展開された

ようだ。棟田もこのとき、手榴弾によって、右足と右顔右頸部を負傷して倒れた。ただちに野戦病院に送られ、済南の兵站病院に移されたあと、青島の病院に転送されて帰還した。

内地へ帰ってから、あちこちの陸軍病院で療養生活を送り、退院を許されたのちしばらく郷里に帰り、再び東京へ出た。そして、出征中にはたびたびの慰問の手紙や品物を貰った長谷川伸に、お礼のあいさつに行った。

あれは、たしか、昭和十三年の新秋ではなかったかと記憶している。はじめて先生におめにかかるために、高輪のお邸にお伺いしたのは……。その年の五月、私は台児荘の戦場で受傷して帰還。しばらく郷里で茫然たる日々を送っていた。その後、上京したのである。

二、三度、お邸の門前を来往してから、意を決して門を入った。門から玄関まで永く広いお庭だったと記憶している。折り柄、来客中の応接間で、私は初めて先生にジカにお会いした。兵隊帰りの不動の姿勢で、私は直立した。その瞬間、多分、私はみっともなく泣いたりするのではなからうかと前々から怖れていたが、ようやく、辛うじて落涙喰い止めたと憶えている。しかし、ハッキリしない。(前出「空席の深さ」)

長谷川伸の方は、「棟田伍長と私」(後述)で、棟田がはじめて訪ねて来た日をはっきりと書いている。

昭和十三年九月十一日、私は卅五年振りで日露戦争時代の戦友大口清次郎君に再会した。場所は私の旧居であった高輪の作房である。二人は若かりし兵隊時代を追想して歓談してある処へ、訪れたものがある。除隊となつた歩兵伍長棟田博君である。私は始めて棟田君の顔を知つた。

昭和十三年九月十一日といえば、「麦と兵隊」が「改造」に発表されてまもない頃である。その評判と人氣が沸騰していたときだ。二人の話題が「麦と兵隊」に及んだことは想像に難くない。棟田には他人に語るほどの文学的実績も業績もなかったが、繼ぐべき家業を棄てて上京し、親族会議で準禁治産者にされるほどの、文学への情熱と野心は持っていた。いま、大衆文壇の大御所と仰いでいる長谷川伸に、「君の『麦と兵隊』を書いてはどうか……」と勧められ、躊躇する余裕も理由もなかった。幸い、勤務先（羊羹の虎屋）の主人の理解と応援もあって、彼は自らの戦場記録の筆を執った。「たしかに『麦と兵隊』は立派な戦場記録にちがいないけれども、最前線で戦っている兵隊のほんとうの姿や氣持を描いていないと思つた……」と、棟田氏から聞いた。

おりしも、長谷川伸の周囲で新しい文学雑誌の創刊の機運があつた。真鍋元之編『大衆文学事典』（昭42・11青蛙房）の記述にしたがえば、長谷川伸の義弟である島源四郎が、第三次『大衆文芸』は、△あゝのころの時代小説の墮落ぶりを見るに見かね、これではならぬと思ひ、文芸復興を願う氣持で発刊を思ひ立つた▽という。そこで彼はまず、第一次『大衆文芸』の關係者をまわつて協力を依頼したが、スムーズには事が運ばず、△やむなく島は、構想をあらためて、義兄個人の後援にたよるべく、長谷川のもとへプランを持ちこんだ。……島の依頼を長谷川は承諾、月額二百円給付の約束をあたえて、一四年三月、第三次『大衆文芸』はその創刊号を世に送ることができた▽のである。

発行所は島の經營する新小説社。編集兼印刷發行人は和田英雄。創刊号の本文は百四頁だから、さほど部厚いという感じはない。創刊号はまず、南支海軍從軍作家集團隨筆集が並んでいる。前述の内閣情報部派遣のペン部隊が漢口攻略戦に向けて出發（十三年九月）したあと、十一月に第二陣として、長谷川伸、土師清二、中村武羅夫、甲賀三郎、添邦三、野村愛正、小山寛二、関口次郎、衣笠貞之助、菊田一夫、北条秀司らが広東方面に向かつた。そ

の報告を右に列挙したうち、長谷川、甲賀、菊田を除く全員が執筆している。創作は三編。土師清二の「子育て代官」、甲賀三郎の「二老人」、長谷川伸の「狸々兄弟」。従軍隨筆と創作欄の間に、「特別読物 分隊長の手記」……としてある。一人、大衆文芸のみが、その名を辱かしてあるべきではない。茲に創刊せる本誌は、現下の我が国に於ける心ある大衆の読物として、真に辱かしからぬ精神的な内容と、品位と、興味とを併せ持ったものゝみを盛つてゆく方針である。……∨との無署名の創刊の辞がある。「分隊長の手記——馬腰場の戦闘——」の筆者名は「歩兵伍長 棟田博」。横書きで「北支戦線、赤柴部隊」。右上に∧青島にて療養中の作者(右)∨とキャプションの付いた写真。顔と頭を包帯で巻いた白装束の姿が傷々しい。その横に∧作者戦歴∨があり、次頁左下に∧戦場要図∨が掲げられている。単行本ではとったが、雑誌発表の書き出しは、∧十一月二十四日の日記より∨となっている。

「分隊長の手記」は、この創刊号から翌十五年六月号まで連載され、とりあえず第八部(14・10)をまとめて、後述のように十四年十一月に新小説社から単行本として刊行された。続編の刊行は十五年七月。さらに、続々編にあたる「台児荘」の連載を十六年一月から始め、七・八月の休載のあと十七年五月に終え、「分隊長の手記」三部作を完結させた。「台児荘」の刊行は十七年十一月である。

第三次『大衆文芸』は発刊のいきさつからいっても、いわゆる長谷川伸門下・グループの機関誌であった。『大衆文芸』が創刊されるとまもなく、村上元三、山手樹一郎、大林清、棟田博らの若手は、毎月十五日に『大衆文芸』の合評会を行ない、やがて長谷川伸の指導する小説の勉強会となり、新鷹会と名付けられ、山岡荘八や岡岡典夫らも加わった。新鷹会は戦後も継続され、戸川幸夫、邸永漢、平岩弓枝、池波正太郎らの直木賞作家を輩出した。

『大衆文芸』も、戦時下の物質不足や言論統制で、多くの雑誌が統廃合を余儀なくされたなかで、昭和二十年三

月の空襲まで続刊し、戦後もいちはやく十月号で復刊号を出した。棟田博は当然のことながら、「分隊長の手記」のほかにも数多くの従軍記や隨筆を同誌に寄稿しているので、以下列記しておく。

|       |                    |    |    |   |
|-------|--------------------|----|----|---|
| 昭和14年 | 分隊長の手記             | 3  | 15 | 6 |
| 昭和15年 | 掃還兵論談会（座談会）        | 5  |    |   |
|       | 従軍写真断片             | 9  |    |   |
| 昭和16年 | 東北六県銃後現地報告         | 10 |    |   |
|       | 台児荘                | 1  | 6  |   |
|       | 沖繩寸記               | 8  |    |   |
|       | 台児荘                | 10 | 17 | 5 |
|       | 悠久の伝統（巻頭言）         | 10 |    |   |
| 昭和17年 | 中支だより              | 1  |    |   |
|       | 感動の意義              | 2  |    |   |
|       | 神鷲のこゝろ             | 9  |    |   |
|       | 危機の中にて（大東亜戦争一周年特集） | 12 |    |   |
| 昭和18年 | 明治想ひ               | 3  |    |   |
|       | 鬪魂（中隊長の手記）         | 4  |    |   |
|       | 落下傘部隊基地より          | 5  |    |   |
|       | 支那紀行               | 11 | 19 | 1 |

(近代文学館所蔵誌を調査したが、一部は未見である。)

### 『分隊長の手記』の評判

『分隊長の手記』が単行本になって世に出たのは、奥付けの発行日を見ると昭和十四年十一月二十五日になっている。わたしの架蔵本は三十版で、十五年一月十日発行、『大衆文芸』の十五年十月号の広告には四十八版と出ており、日本近代文学館の所蔵本は十九年五月二十日発行で、実に六十版と記されている。百万部を越えたといわれる『麦と兵隊』には及ばなかったとしても、わずか一カ月余で三十版を重ねたところに、この書がいかに多くの読者を得たかを物語っている。

黄色の地に墨で兵隊の群像を描き、「分隊長の手記」と「赤柴部隊 棟田博著」の文字を朱色で書いている表紙は、『麦と兵隊』とそっくりである。上田広の処女作『黄塵』(昭13・11 改造社)もよく似た感じだった。『麦と兵隊』は陸軍報道部派遣の従軍記であったから、専門のカメラマンも同行していて、本文にも随所に写真が載っているが、『分隊長の手記』には青島の陸軍病院で撮った著者の口絵写真のほかは見あたらない。

『麦と兵隊』は、芥川賞受賞後の第一作でもあり、すでに『改造』に発表された当初から大きな話題と評判を得ていたこともあって、著者の「前書」とカメラマンの「フォト・ノート」、例によって上司の「所感」が付載してあるだけなのにたいして、『分隊長の手記』の方は、長谷川伸(「棟田伍長と私」)、土師清二(「内に燃える火」)、堤寒三(「感想」)、恩地孝四郎(「実体鏡のやりに」)、島田正吾(「第一線を往くもの」)らの師や先輩が賛辞

を寄せ、いかにも新人の処女出版らしい。この種の戦記では普通となっていた軍人上司の推薦文が載っていないのも印象的だ。

『分隊長の手記』をいちばんはじめに新聞で広く紹介し、高く評価したのは杉山平助である。昭和十四年十二月二日付の東京朝日新聞の「槍騎兵」欄に次のように書いた。

最近まつたく未知の作家たる棟田博の新著「分隊長の手記」を一読し、日本の戦争文学はさらに又一異色を加へ得たことを感銘した。事変以来戦場からあらはれた文学者としては、火野葦平、上田広、日比野士朗の三君が最も有名であるが、「分隊長の手記」はそのいづれに比しても遜色なく、むしろ多くの点で、これまで我々が渴望して得られなかつた点を、補足し、優に彼らを凌ぐものさへ具へてゐるのである。

私は読みながら、いくたびか涙を流し、またいくたびか破顔一笑を禁じえなかつた。そして読み終つた時には「どうも有難う」と書物を推したゞいて頭を下げたいやうな感銘にとらはれた。こゝには凡そ文学的な裝飾や野心や或は「高級」な何ものもない。たゞ生々しい日本人の心が流れてゐるだけだ。それも最も平凡な日本人、天才でもなければ、名士でもなく学者でもない。市井の片隅に一山何十文と積み上げられるまでゴロゴロしてゐるありふれた日本人が、戦場に出て如何に戦ひ、何を感じてゐるかといふことが、生々しい血の温かさをもつて描き出されてゐる。「日本人といふものが知りたい奴はこの書を読め！」と私は読みながら、いくたびか心の中で呶鳴つたことであつた。

中村武羅夫も『新潮』（昭15・2）の文芸時評「戦争文学の多様性」でこれを大きくとりあげた。

こゝに一人の「日本人」がある。前線も前線、最前線の尖兵となつて、死線から死線につゞく弾丸雨飛の連続の中を突破して進んでゆく日本人の赤裸々な魂と赤裸の行動とが、極めて正直に、率直に、記録されてゐる。読者は何等の儀礼も、何の虚飾もなく、一糸も身に纏はない素ッ裸の棟田氏の姿を——棟田氏に依つて表徴されてゐるところの日本人の姿を、こゝに見るであらう。……（中略）

火野氏の兵隊物その他に於いては、兵隊その物を描き出すことよりも、「戦争」といふものの方を描き出すことに、力点を置いてゐるかのやうな感銘を受ける。ところが棟田氏の「分隊長の手記」は、「戦争」とか、「作戦」などといふことは、何が何だか分りもしないし、また、兵隊といふものの立場から、さういふ高度の戦争の動きなどは分らうともせず、たゞ日本軍の一兵隊としては生命を鴻毛の軽きに比し、言語に絶した困苦と、惨憺たる実状の中に、たゞ戦ひ、ただまづしぐらに行軍してゆく兵隊の気持や、状態を飽くまで兵隊に即した立場から書いてゐるのである。だから戦場に於ける兵隊といふものの実際の立場や、気持を知るといふ点に於ては、「分隊長の手記」は、「麦と兵隊」や、或ひは「花と兵隊」や、などより、すぐれた点を持つてゐるとも言へるし、はるかに感動的な点があると言つていい。

中村がいうように、火野葦平とても「麦と兵隊」で、△兵隊そのものを描き出すことよりも、「戦争」といふものの方を描き出すことに、力点を置いていたわけではない。そのことは「前書」で、△これは、徐州戦線に於ける全般的な戦況とか作戦とかには何の関係もないもので、単に、私が従軍中毎日つけた日記を整理し清書したに過ぎないものであります▽とことわつてゐるし、彼もまた△ただ戦の、ただまづしぐらに行軍してゆく兵隊の気持

や、状態を飽くまで兵隊に即した立場から書いてゐるVはずだ。火野葦平も棟田博と同じように階級は歩兵伍長、身分は兵隊であつた。

とはいえ、たしかに「麦と兵隊」と「分隊長の手記」の読後の印象に明白な相違があるのは、おそらく素材や視点のちがひ、文学的力量や表現力の差が歴然としてゐるからであらう。「麦と兵隊」は徐州作戦を題材にしてゐるとはいへ、壮烈な徐州攻撃の戦鬪の様子が描かれてゐるのではない。そもそも著者は徐州に入城してゐないのである。「徐州、徐州と人馬は進む……」と流行歌にも歌われているように、これは徐州へ向かつて行軍する兵隊たちの随行記である。しかも五月四日から二十一日までという、わずか二週間あまりの短期間だつた。この間に著者が遭遇した戦争らしい戦鬪といへば、孫干で受けた襲撃くらいのものである。

ところが『分隊長の手記』は、「戦線へ急ぐ」に始まり、「馬腰場の戦鬪」、「決死隊出發」、「黄河敵前渡河」、「済南城突入」、「城壁の下士哨」、「出發前夜」、「夜襲」と続く各章の見出しを一瞥しただけでも明かなとおりに、編まさに白兵戦の実戦記録である。著者が参戦した台児莊戦線は、前述したように中国軍もここに集中攻撃をかけた「支那事变」初期の最も激しい戦鬪が展開されたのである。そのうえ著者は負傷までしたのだつた。ただし、負傷したときの状況は、第三部の「台児莊」でふれていて、正統編の「分隊長の手記」には出てこない。

なによりも「麦と兵隊」が、「徐州会戦従軍日記」であつて、著者自身の実戦記録でないことが、「分隊長の手記」との決定的なちがひだ。火野葦平は陣中で文芸春秋社特派の小林秀雄から芥川賞を授与されたあと、報道部に配属されて、徐州作戦には報道部員として参加したのである。むろん、報道部員といへども彼の場合は兵隊の身分であり、すでに修羅場も幾たびかくぐりぬけてゐるから、新聞や雑誌が派遣した文学者とは、身分も立場も視点もちがう。が、「麦と兵隊」に関するかぎり、彼は最前線で戦う一兵士ではなく、観戦して記録する従軍兵だつたの

である。

「分隊長の手記」の特徴は、中谷博が「棟田博論」(『大衆文芸』昭16・11)で指摘しているように、(文章が平易であり、意識が大衆的であり、態度が中庸であるところなどが、一般大衆にとつて好個の読み物たるにとどまらず、日本人たるものゝ心の糧としても役立つところ多く、文字通り感激の湧き起るものを覚えさせられる)点にある。「麦と兵隊」の表現や描写も素朴で簡素で、文学的虚飾も格別にはないが、用字や用語を比較すれば、そのちがいは明かである。「麦と兵隊」には、周囲の風物への目配りや民家の戸口に書かれた詩句のたんねんな引用が目についても、「分隊長の手記」にはそうした著者の配慮はほとんど見られない。しかし、兵隊たちの日常会話の記述が目立ち、最前線における兵隊たちの挙動が、ユーモアを交えた口語で語られているのは親しみやすい。銃後の国民にとって、「麦と兵隊」と「分隊長の手記」のいずれにより深い感銘を受け、感動したかをいちがいに断定することはできないけれども、この二冊の著書が従軍記や戦記物が氾濫していた当時、破格の売れ行きを示していたことはまぎれもない事実である。

### 戦時下の活躍

『分隊長の手記』でいちやく有名になった棟田博に、さっそく『主婦之友』から戦地特派員の口がかかった。この本が世に出て半年後、昭和十五年六月に漢水戦線・宜昌攻略戦の現地に向かった。博文館から大仏次郎、講談社から竹田敏彦、『文芸春秋』から火野葦平らが同行した。この従軍報告は八月号の「新戦場から」と九月号の「さよなら戦場」にまとめたが、筆者について(「分隊長の手記」の棟田博氏を漢水戦線に特派……)と紹介している

の目をひく。

続いて翌十六年の十月はじめにも、彼は再び戦地に出かけた。こんどは陸軍の従軍命令である。十月二日付の朝日新聞に、△棟田博、山岡荘八、河部正雄、撰津茂樹の四氏は、陸軍省臨時囑託として目下進行中の湖南作戦に従軍し、一日午後三時東京発列車で出発……▽という小さな記事が出ている。この間に、全国及び大陸海外放送で東北六県統後現地報告をするために、十数日間にあつて東北各地を巡り（十五年八月）、火野葦平、上田広、日比野士朗、中野実らの掃還作家を中心にして結成（十六年七月）された文化奉公会に参画し、軍事保護院の仕事で沖繩にも行っている（十六年八月）。

昭和十六年十二月八日の米英との開戦の報は、さきの陸軍命令の従軍途上にあつて、上海に近い揚子江の船上で知ったという。『文芸年鑑』二六〇三年版を繰っていくと、昭和十七年三月、△翼賛会文化部の斡旋で作家画家が翼賛紙芝居研究会を結成▽し、棟田も役員に名を連ねている。八月一日から一週間、日本文学報国会主催の文芸報国講演会の第一班に加わつて近畿地方を講演旅行した。演題は「台免苑の回想」。この講演旅行については、事務局から随行した巖谷大四が、『非常時日本文壇史』（昭33・9 中央公論社）で詳しく述べている。十二月は『台児荘』で第二回野間文芸奨励賞を受賞した。十二月十七日に講談社の講堂で贈呈式が行われた。

それから半年、もはや日本の敗色が決定的になるに及んでも、またもや彼は中国へ渡つた。

『大衆文芸』の十八年十一月号に、△半歳にわたり、中支・北支の旅より帰られた棟田氏……▽（編集後記）の記事が見え、十九年一月号まで「支那紀行」を連載するが、二月号ではやくも△筆者、南方従軍のため休載▽と出ているから、この年は前半を中国で過ごし、落ち着くまもなく南方従軍に赴いたのであろう。なお、「大東亜戦争」開戦前後に、陸海軍に徴用されて大勢の文学者が報道班員として、南方の戦地へ送られたが、棟田博の従軍は

それとは別行動であったようだ。約一年間、南方各地を飛び歩き、日本軍の最後の状況を見とどけて来た彼は、その模様を、「インパール戦線報告」（『大衆文芸』昭19・11）、「インド戦線の記」（『キング』昭19・12）、「戦記・印度戦場」（『講談倶楽部』昭19・12）などで伝えた。

昭和二十年という年がきた。五月。わたしは命を受けて北支へおもむき、ついで蒙疆へはいった。終戦に逢ったのは大同であった。（略）その後のわたしは、八路軍包囲下の大同から張家口に脱出し、九月、ようやく北京にたどりつき、翌年五月まで同地にいたが、案の定、こじきにまがうまになり下がっても、なお生き長らえて、祖国への引き揚げ船に乗った。（「拝啓天皇陛下様」）

「大東亜戦争」の開戦を異郷の地で知った彼が、その終結もまた異郷の地で迎えねばならなかったとは、なんと運命的で象徴的なことか。思えば彼は「支那事变」から「大東亜戦争」に至る八年の間に、なんと戦地に出かけ、どれほどの歳月を戦場で送らねばならなかったことか。いつも引合いに出す火野葦平にたいして、安田武は、

日華事变勃発当初から太平洋戦争の末期まで、火野ほどに、この戦争に、しかもその主戦場に身を挺した一兵士が他にあるだろうか。火野の三十代は戦場と共にあった。私は、火野の年譜を開き、その従軍参加した大なる戦闘地域と、そこで戦われた数々の戦闘の事実を思いあわせる時、ほとんど言葉をうしなうのである。敢えていえば、「年譜」は、キナ臭い銃弾の硝煙につつまれている。三十代はもはや青春ではない。青春ではないが、いや、青春ではないからこそ、青年期の終りから壮年期の初めにかけて、十年に近い歳月を戦場に身を

曝しつづけた、「数奇」な運命の「一兵士」——「一作家」のことを思うのである。

(『定本戦争文学論』昭52・8 第三文明社)

と、慨嘆しているが、棟田博の三十代も戦場と共にあったのである。彼の甘受した運命の過酷さも、決して火野葦平に勝るとも劣らぬものであった。いや、戦場で負傷して帰還し、敗戦後なお外地で抑留生活を強いられた棟田の方が、もっと悲惨であったともいえよう。

ただ、火野葦平には兵隊作家として文名をあげる以前に、芥川賞という勲章があった。小倉中学から早稲田大学、さらには郷里での生活を通じて、文学なかまや文学活動があった。だが、当時の多くの大衆文学作家がそうであるように、棟田博には経済的にも学歴的にも恵まれず、文学への情熱と野心はあっても、それを發揮し、活用する機会がなかった。それゆえ、兵隊体験と兵隊作家ブームの到来は、彼の野心と情熱を満足させる千載一遇のチャンスであったとはいえない。その意味で、棟田博にとっては、兵隊体験と八十年に近い歳月を戦場に身を曝しつづけたことが、むしろ貴重なそして唯一の文学的財産であった。

芥川賞作家の火野はともかく、彼に続いて兵隊作家としてもはやされた上田広や日比野士朗には、なまじ兵隊作家である以前に、文学的な実績や活動があり、戦記以外の文学への志向もあったから、戦後は自らの戦争体験を語ることはほとんどなく、あげくのはてに文壇から消えて行かざるをえなかった。しかし、棟田博には自らの戦争体験だけが、唯一の文学的財産であったから、執拗にこだわり、それを語り続けた。そして時代の風潮の変遷とともに大衆文壇に復活し、マスメディに再登場して来たのである。のみならず、『棟田博兵隊小説文庫』全九卷(昭44・1(光人社))まで刊行されるにいたった。ちなみに、同社は『火野葦平兵隊小説文庫』全九卷も刊行している

が、戦時中に活動した作家の、兵隊小説ばかりを集めた個人全集はほかにはあるまい。兵隊作家といえ、火野・上田・日比野が並べられ、論ぜられることが多いが、火野に並ぶべきは棟田博ではなからうか。

## 棟田 博 著書目録（昭和二十年まで）

|         |         |       |
|---------|---------|-------|
| 分隊長の手記  | 昭 14・11 | 新小説社  |
| 統分隊長の手記 | 昭 15・7  | 新小説社  |
| 背囊      | 昭 15・12 | 新小説社  |
| 中華理髪店   | 昭 16・11 | 新小説社  |
| 馬来上陸 ※  | 昭 17・4  | 東光堂   |
| 戦地だより ※ | 昭 17・7  | 学芸社   |
| 俘虜 ※    | 昭 17・10 | 東光堂   |
| 祖国の顔    | 昭 17・10 | 湯川光文社 |
| 台児荘     | 昭 17・11 | 新小説社  |
| 軍神加藤少将  | 昭 18・1  | 講談社   |
| 奉天曾我    | 昭 18・11 | 忠文館   |

注 ※印は未見。棟田博氏のご協力を得ましたことに謝意を呈します。